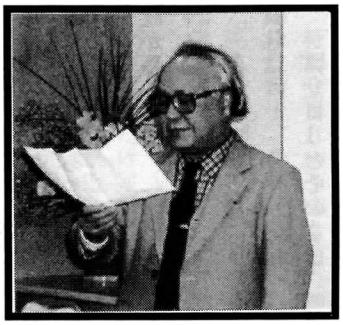
熊本・徳永直の会会報
第４０号

森上幸義氏を悼む



徳永直生誕百年祭第二十二回孟宗忌に、森上幸義氏の姿が見えなかった。前年秋の大手術後十分回復していなったためである。退院して自宅療養中で、孟宗忌の報告を電話でした折は、元気な声が返ってきた。それから本当に間もなく、突然訃報がとび込んできた。病気全快に近い時の急死であった。今や彼の朗々たる詩吟を耳にすることはできない。会報で彼の漢詩に接することもできない。森上氏は熊本・徳永直の会発足当時からの世話役の一人だった。熊本市立高校の教頭時代、職務多忙でしばらく孟宗忌に姿が見えないこともあったが、教頭をやめてからは、毎年彼の自作の漢詩朗吟がなければ孟宗忌も成り立たない有様であった。

森上幸義氏は努力の人であった。終生学に志ざし倦むことを知らなかった。彼の論文に博士の学位が与えられなかったことが心残りである。その点彼もさぞ残念であったろう。しかし彼はまさに「人に知られずしてうらみず」を地で行った人であった。彼の人柄や想い出は幾人かの方々に語ってもらった。今号はそういう意味では、森上幸義氏追悼特集号である。本会の追悼号は一六年前第13号で、高光義明氏の追悼特集以来である。追悼から想起すれば、徳永直文学碑の土地提供者である寺崎フサエさんも一〇月お亡くなりになった。ご遺族の方に弔電を打った。ご遺族の方には今後ともよろしくお願いする次第である。生誕百年祭には東京からわざわざ参加していただいたエス・チャング氏（前号事務局だより参照）が、九月全く突然お亡くなりになった。彼は熊本がすっかり気に入っておられ、昨秋には再来熊の予定だったし、ラフカディオ・ハーン顕彰にも関心があり、今年はそのハーン生誕百年祭も計画されているので、楽しみにしておられたのだった。

おもえば本会は、金銭的精神的に直接的間接的に、多くの方々の支えによって成り立っている。亡くなられた方に想いを馳せるにつれ、そのことをひしひしと感ぜずにはおられない。

（中村）

第二十三回孟宗忌御案内

二月十三日（日）午後二時～二時半
徳永直文学碑前（立田山山麓泰勝寺入口）
偲ぶ会　午後三時～五時
熊大東側御食事処まさ
会費三千円

望郷の宴

大橋　三千代

静寂
堀割をどんこ舟が行く
水も空気も
竹ざおの先にとまる

輝く瞳の遠くに
息づく故郷があった

歳が暮れる頃
沖ノ端の潮の匂がやってくる
　酒は憂いの玉箒
貝柱は
　コリコリとそのまま
　ドンと皿に盛り
　たらふく食うべし
ビラは
　三杯酢にたっぷり浸し
　ズルリと掻き込み
　胃の腑に落すべし

丸々とした掌の中で
レモンが可憐であった

森上さんの笑顔

木庭　克敏

森上幸義さんといえば、熊大の中村青史先生の研究室で行われた徳永直の会の事務局会議での情景が想い浮ぶのである。

なにしろ事務局員は私をのぞいて皆酒豪ぞろいである。それに中村先生の研究室には、アルコールの類が山積みされているのである。事務局会議は討議事項の話し合いもそこそこに、酒宴に入るのが常であった。森上さんは事務局会議のたびごとに、実家の柳川の手づくりの酒肴を持参された。それが実に酒にあうのである。酒宴がいやが上にももり上ったのは言う迄もない。森上さんが笑みを顔いっぱいにたたえて、うまそうにコップ酒を口にはこんでいた姿が今でも目に浮ぶようである。

森上さんは教育労働者の典型ともいうべき気質を持っていらっしゃった。教育現場で、又グループ活動等に於いて、さまざまなご苦労や不満を経験されたと思うが、そういう愚痴は一切もらされなかった。そして常に楽天的で明るく、前向きの姿勢を堅持されていた。

徳永直の会の会報には必ず自作の漢詩をのせられたし、徳永直文学碑の前で行れる孟宗忌の集いでは詩吟を朗詠された。森上さんの存在は徳永直の会の活動にユニークな彩りを添えていたと言えるのではないか。

森上さんは今やこの世にはいらっしゃらない。しかし私達は彼の遺志をついで、徳永直文学の普及という事業をつづけていかなければならないと思うのである。

「隠徳の士森上幸義さん」

中田幸作

森上さんが「徳永直の会」の会報で自作の漢詩を発表されたり、「会」で詩を吟じられたりされるのを何度かお見かけするうちに、学校の先生とは自然に知ったが、私が二十年近く会計をやった「詩と真実」の会員とは知らなかった。それも普通会員の倍近くの会費を払う奇特な特別会員とは。

特別会員といっても何の特権もない、百数名の中の六、七人。医師や弁護士、会社社長という懐の豊かな人たちが主だった。その人たちも仕事が忙しくて会費が遅れたりすると、そのつど赤い振込み用紙を送って督促した。特別会員には代議士や県会議員も含まれたが、金払いのいいのは選挙の前だけで普段は赤い用紙の常連だった。中には名前だけ並べて三年も払いがなかったので削除した先生もある。そんな中で几帳面にその年の初めに会費を納められていたのが森上さんだった。それで私は一面識もない森上さんを有難い人だとフルネームで覚えていた。

それが「直の会」の森上さんと同一人物だと気付かなかったのは、プロレタリヤ作家を偲ぶ会という性格からだったろうか。私の愚鈍さからだろうか。それとも文学碑前にゴザを敷いたり、中村研究室の廊下に坐ったりしてメザシやスルメに焼酎の酒もりにあったのだろうか。特別会員がそんな所にいるとは思われなかった。

熊大に何とか館という集会場ができて、そこで「直の会」の宴があった時だ。恰幅のいい体を仕立てのよい服で蔽った年配の紳士が受付で会費を払っていた。その後ろ姿に若い婦人が「森上先生」とかけ寄っていく声を聞いた。私はその時ふいに「あ、もしかしたら特別会員の…」と天の啓示をうけたように思った。私はすぐ挨拶に行ってお礼と詫びをのべたが、それから二年後森上さんの訃報を聞いた。陰徳の士の逝去を悔やむばかりだった。　合掌

カニの塩辛　―森上氏を追憶う―

岩本　税

私はアルコールから好かれているらしい。量はそう多くはないが、ほとんど毎日晩酌は欠かさない。医者がくれる薬もアルコールで飲むので、「それは止めなさい」というが、仲々持病の高血圧症も直らない。ただし、飲む時は必ずツマミを必要とする。何か口にしないと受付けてくれない。

一昨年のことだったと思うが、「それから」で徳永直の会の役員数人で年忘れの会となった。その時森上氏が瓶詰の妙なものを出した。カニの挟や甲殻・脚足類が、赤色と白色の配色よくまざっている塩辛であった。「どうぞ」と言うので一つまみ試食となった。堅いので入れ歯を損じない様に、じわーっと噛みしめた。とてつもなく塩っ辛かった。が、しばらくすると、甘く美味い、海棲動物蛋白質類の塩漬け独特の味である。余計に食べられるものではないが、とにかくウマかった。

森上氏は福岡県柳川の生れで、幼い時からカニの塩辛で育ったと言っていた。

「今度帰省したら、私へのお土産はカニの塩辛を……」と特注しておいたが、その望み果せず彼は、一九九九年三月還らぬ人となってしまった。

『知己の友　ぞ　宜き』

―劉君の在るところに神仏の護持がある―

森　上　幸　義

劉禹錫（七七二～八四二）は柳宗元と共に王叔文の党に連座して、叔文の失脚とともに朗州（湖南省）の司馬として左遷されたといわれます。永貞元年（八〇五）のことであったようです。

十年後の元和十一年（八一六）、都へ召し還されました。そのときに都の玄都観という道教の寺で、道士が植えた桃が今を盛りと大評判になっていました。その玄都観へ花見に向かう人々に贈る詩を作りました。ところが権力者はこの詩をやりだまにあげるのでした。この詩は、作者が都を逐われたあと、朝廷に新しい人々が現れて、政権をわがもの顔に時めているのを諷刺していると、こじつけたのでした。すぐにまた地方へ放逐されることになったのです。そのいわくつきの詩だというので有名になったのでした。それが次の詩です。七言絶句の詩です。

自朗州至京　戯贈看花諸君

（朗州より京に至り　戯れに花を看る諸君に贈る）

紫陌紅塵払面来　（紫陌　紅塵　面を払うて来たる）
無人不道看花回　（人の　花を看て回ると道はざるは無し）
玄都観裏桃千樹　（玄都観裏　桃千樹）
尽是劉郎去後栽　（尽く是れ　劉郎去って後に栽う）

長安の街路上、紅塵が面を払って春先の気がただよっている。ぞろぞろとひきつづきに通る人々は、誰しもが桃の花を見ての帰りだと言わぬものはない。今を盛りと咲くという、あの玄都観の千本の桃、それはみんな、劉郎が去った後で植えられたものなのだ。

ずっと昔のこと、劉晨と阮肇の二人の男が、天台山に薬草を採りにいき、谷川をさかのぼっていくと、二人の仙女に逢って、その婿となり、おおぜいの女たちが桃の実を祝いに届けた。二人はそこで半年の間楽しく暮らし、ホームシックにかかり郷里に帰った。知るべはなく、今暮らしている人々は七代目の子孫であった、という話であります。仙境にゆかりのある桃と、その桃にゆかりのある劉晨と作者の姓である劉とをかけて洒落たのでした。

再度の放逐に見まわれた劉禹錫の任地は播州（貴州省）でした。この時のこと、柳宗元が、年老いた母をもつ者には遠すぎて気の毒であると取りなし、連州（広東省）の方へ変更になりました。柳宗元に支えてもらったのです。連州の刺史を初めとして、二つの省を経て、十四年目に都へ召還され、主客郎中となったのです。

さてここからが劉禹錫の本領のご披露となるわけです。いわく付きの玄都観の桃に挑むのです。しかも長い序文付きなのです。

（余、貞元二十一年、屯田員外郎と為る。時に此の観に未だ花有らず。是の歳、出でて連州に牧たり、尋いで朗州司馬に貶せらる。居ること十年、召されて京師に至るに、人々皆言う、道士仙桃を手植えする有り、満観紅霞の如し、と。遂に前篇有り、以て一時の事を志す。施ち又出でて牧たり。今十四年にして、復た主客郎中と為り、重ねて玄都に遊ぶに、蕩然として復た一樹無し。唯だ免葵燕麦、春風に動揺するのみ。因って再び二十八字を題し、以って後遊を俟つ。時に太和二年三月なり。詩に云う。）と。

都にまいもどり玄都観に出かけると、無復一樹（復た一樹無し）と、今回は一本の樹もなかったのです。だから、再度七言絶句の詩を作り（題して）、これによってまた放逐されるのを待つというのです。まさに挑戦ですね。詩の中で、それを結晶させています。承句と結句がすごいですね。

百畝庭中半是苔　百畝（ほ）の庭中、半ば是れ苔なり
桃花浄尽菜花開　桃花浄（お）ち尽くして、菜花開く
種桃道士帰何処　桃を種うる道士、何（いず）れの処にか帰せる
前度劉郎今又来　前度（ぜんど）の劉郎、今又た来たる

（注）「今又来」は、別本には「今独来」とある。

反骨の精神が盛んですね。この心意気をすでに理解していた柳宗元もすばらしい。再度物議をかもし、礼部朗中、集賢殿直学士を歴任して、地方へ出ることになる。晩年には洛陽にあって太子賓客となり、検校礼部尚書で終わり、没後、戸部尚書を贈られたのです。晩年はもっぱら白居易と交わり、白居易から「詩豪」の評をもらったのです。

「劉君の詩の在るところに、神仏の獲持がある。」とは白居易からの称です。したたかな生き方への称賛でありましょう。「前度劉郎」（前度の劉郎）は、一たび去った者が、再度やって来る者を称する言葉として活き続けるのです。柳宗元、白居易に感謝し、劉禹錫に支援を贈りたいのです。字は夢得（むとく）でありまして、まさに、彼の生涯を暗示させるものであります。白居易とは同年生まれだと伝えられています。

（平成5年8月27日熊本木鶏クラブ「シャモ便り第27号」より）

在りし日の森上幸義氏

泥棒国家日本

沢田博行

福島熊本県知事は国の消費税引き上げに賛成である。さすが前回の県知事選に「県民党」から出馬した人だ。熊本県民が血の涙を流せるように、色々応援してくださる。有り難くて怒髪天を衝く。それではどうして福島知事は消費税引き上げに賛成なのだろうか。それはあと少しで熊本県の財政が「破産」してしまうからである。福島知事が就任以来さんざんムダ使いしたため、熊本県の貯金を食いつぶしてしまったのである。しかし今のスピードでいくと、自分の在任中に「破産」してしまう可能性さえある。県知事としてこれほど不名誉なことはない。しかも「破産」すれば、国の管理となってしまうのである。勿論熊本県民の税金も上がる。

しかし、国が消費税を上げれば、熊本への交付金が増える可能性が出てくる。その上、特別地方消費税も上がるのである。となれば熊本の財政は相当うるおうことだろう。これではまるで細川重賢の宝暦の改革である。自分達のムダ使いで破綻した財政を、増税によって立て直す。まさに悪魔の所業である。

それではどうして政府は消費税を引き上げようとしているのか。ここ数年景気回復をめざし、過剰な公共投資を続けてきたため、国債を発行しすぎ国の借金が、莫大なものになってしまったからである。勿論景気を回復させるため、公共投資を行なうのはそれほど間違いではない。しかし、今度のバブル崩壊の不景気は今までの不景気とは違いいわゆる「復合不況」と呼ばれるもので、公共投資だけに頼る政策は間違いだったのである。公共投資とともに、規制緩和とベンチャー企業の育成といった政策を実施しなければならなかったのだった。その政策の誤りがますます景気の回復を遅らせたのである。

おまけに日本の官僚というのは、よほどのバカらしく、景気の回復が見え始めたときに、消費税を3％から5％へと引き上げてしまったのだ。その結果回復しかけていた景気はどん底へと落ちこみ、未曾有の大不況を引き起こしてしまったのである。そのまま放っておけば、景気の回復にともない、自然に税収が増えていたはずなのに。

しかも、景気の落ち込みの原因が消費税導入だとはっきりした時、直に誤りを認め消費税を引き下げれば良かったものを、誤まりを認めれば、自分達の責任が問われる為め、そのまま強引に突き進んだのである。そのせいで、ますますの公共投資が必要となり、平成十二年度はついに国の借金が、国家予算のほぼ半分となる異常事態となってしまった。

それにもかかわらず、政府はまた消費税を引き上げようとしている。そうなればまた不景気がひどくなり、政府はまたまた公共投資をしなければならなくなり、ますます国の借金が増え、そしてまた消費税の引き上げが行なわれるのである。

本来、どこかで税金のムダ使いを無くす努力をしなければならないはずなのに。そういう努力はせず、ぬくぬくと税金のぬるま湯につかってしまい、バカな事ばかりくり返している。消費税の福祉目的税化という議論もあるが、消費税が福祉に使われたとしても、その分本来福祉に回されるはずだった、他の税がムダ使いされてしま

うだけである。

日本政府も福島県知事もやっていることは同じ税金のムダ使いである。日本国民は税金という名目で、私有財産をむしり取られているのだ。日本は先進国などというが、官僚や政治家という悪徳役人が独裁する、泥棒国家でしかない。

核と飢えと

上村勝明

北朝鮮に戦争中の日本を投影して考えるのは無理からぬことである。なにより支配の構造ー忌憚なくいえば弾圧のシステムーが似ている。かれらはそれを日本のファシズムから学んだかの如くである。外交手腕はかれらが数等上だ。それとも狡智とでも称すべきものとしてうつり、好意を持つのを難しくしてしまう。かてて加えて軍事力の問題がある。

経済的に貧困で、しかし軍事力は並み以上という国ほど厄介なものはない。例示するまでもないことだ。われわれ自身、すなわちさきの戦争勃発を挟んだ数年間の日本はことにそうであった。

孤立した貧乏国が軍備の増強に意を用いるのはいたしかたのないことである。その時代最強の武器を備えようとするのも自然の成り行きであろう。現代だったら核だ。

わが国は敗戦国という事情から他律的に、そして核の被爆国であるという事情から自律的に、核武装に踏み切らなかった。核でやられたのだから核でやりかえせという発想はついに生まれなかったし、生まれようがなかった。それで半世紀以上やってこれたのだから幸運というほかない。これからはいいことばかりではないというのが北朝鮮がつきつけた問題である。

ロシアも中国も核を持っている。ロシアにいたっては持ち過ぎていて、経済的に持ち続けられないほどである。そして朝鮮半島の北半分が限りなく核武装に近い。南北が統一されたら、かりに南が主導権を握ったところで、半島全体がそうなる。この問題についての南の態度にはどこか曖昧な部分が感じられるのはそのためだ。太陽政策といえば聞こえはいいし、またそうするしかなかろうが、いつか労せずして核を手に入れることができるという計算が含まれていないとは断言できないだろう。

ついでだがドイツがフランスの核武装核実験に対して強力に反対しなかったことも参考になる。Ｅｕ共同体になれば核は他人のものではなくなるのだ。

周囲を核で囲まれた日本が核大国のアメリカを介して対策を講ずるのは当然である。こと核に関してはいたしかたがない。日本は核保有国の間で右往左往、なぶりものになっている感もある。核を持たないことに付随する苦しみをこれからしこたま味わうことになろう。

もちろんこのことは日本が核を持つべきだという主張と直結しない。この点についての損得勘定は単純ではないからだ。ただし核なしで済ますことができればそれに越したことはないし、また日本はそう努力する以外に選択肢がないことは今後もこれまでとかわりない。食う物のない軍事強国の射程圏内で冷や汗をかきながらやっていかねばならないのである。それはもはやーというかもともとというかーきらびやかな旗印とはなんの関係もないいわば渡世の苦しみ

なのである。

北朝鮮は情勢の変化でやむなく一国社会主義のようになってしまい、経済も一国内に閉じ込められてしまった。気の毒な面もある。しかし方向転換を外部から妨げられたわけではないのだから、世界の状況に即応しなかった責任はもっぱらかれらにある。ただし、食糧援助は時を移さず、留保をつけず、さっさとやったがいい。

思い起こすまでもなく、わが国もひどい食糧不足で苦しんだことがあった。世界を敵にして戦争をすれば、その経済も当然プラスマイナスのすべてを一国内で済まさなくてはならない。プラスはなかった。

日本が自分のほうから戦争に打って出ることはもうないだろう。核を持たないということでそれはもう決定的なことだ。せいぜい親分アメリカの命で動くことはあるだろうが。しかし戦争を始めなくても経済が国内の狭い範囲内にいやおうなく閉じ込められることはあり得る。人口が限りなく増えて、地球全体が疲弊してきているのだから、これからはいわば、＜平和的に＞ある日突然食う物がないということだって起こり得るのだ。ある日突然は誇張だとしても、ある年突然くらいは覚悟しておかなくてはならない。

北朝鮮は近年凶作という事情もあるから、平年にならして食糧の自給率はどうなのだろう。以前は食糧不足の話をあまり聞かなかったから、かなり高いのではなかろうか。少なくとも日本のように極端な外国依存ではないはずである。日本は外国からの供給が滞ったら、ただちに飢えてしまう国なのだ。しかもこれはわたしたちが近い過去において経験し、証明済みのことなのである。工業生産が盛んであるということだけが今それをカバーしている。今後もずっとカバーできるかどうかわかったものではないのである。

Ｇ７などいうが、なんで日本がＧなものか。外国へ行ってみるといい。アメリカやカナダはいうに及ばず、ドイツとかフランスにしても広大な農業地帯を持っている。かれらは工業先進国であるまえに、ゆるぎない農業大国なのだ。農産物をめぐって、まるで不要な余り物を押しつけ合っているような状態だが、これはある面では夢のような話である。状況がどう変わるかわからない。何度もいうが、日本を除いたかれらは食う物をもともと持っている国である。日本はそうでない。

北朝鮮の現状に過去の日本を見るのも一つの確認として無意味ではない。しかしあと一つ、そこに将来の日本に対する警告もあるのではなかろうか。しかも危惧されるそのことは日本のいかなる悪しき行動もなしで起こり得ることなのだ。あらゆる外交努力や保障、約束が意味をなさない状況における食う物の問題を二の次にしていいはずがない。

国レベルのことに関して具体的な案があるわけではない。やきもきするだけである。市民生活のレベルで素人が考えることはそれ自体としてはお笑いの域をでない。しかし考えないよりはましだと思っていうのだが、たとえばもいちど農地解放をやってみてはどうか。そうして失業者を幾分なりとも吸収できるようにすれば、農地も蘇るし、このリストラ地域も少しは明るくならないだろうか。また都市部で庭造りをする際はその何パーセントかは必ず菜園にするとか。花に囲まれた畑！ヨーロッパでは格別珍しいものではない。ビルの多くに屋上菜園を設けた場合もそのメリットはかなりのものだろう。こんなのはミニ生産、サブ生産にもあたらないだろうが、非生産、

反生産に終始している都市生活に疑問を投げかけるくらいの効果はあるだろう。

垣根がわりに植えられていた道端のキュウリを一本失敬して大学教授が持ってきた。「これは何だか昔のキュウリに姿が似ている。ナニいいんだ。いつだったかどうぞどうぞといっていたから」いっていたかどうかはともかく、こんな風流にも味がある。作った婆さんの怒った顔、笑った顔、両方思い浮かべながら、キュウリもいい味だった。お叱りは食べたわたしがお受けします。

わが国にも知恵者は多いから、かれらの意見を汲み上げるくらいの努力はなされているに違いないが、それがまとまった形で出て来ていない。まるで問題そのものが存在しないかの如くである。どんな問題であれそれを解決に近づけるには社会成員の多くが問題を意識しているかどうかが鍵となる。食糧不足にしろ飢えにしろ、わたしたちがそれについてきっちりしたイメージを持つこと、そのことが解決へのプロセスを支えるエネルギーとなるのだ。わたしが言いたかったのはそれである。

memento et spera. 記憶せよ、そして希望せよ。

☆二〇〇〇年度会費納入者（一九九九年十二月末現在）

泉　浩　一木和世　井上栄次　岩本　税　植村勝明
内野きみ子　浦田義和　大木綾子　大我　孝　緒方直臣
大友清子　大橋三千代　尾脇苓子　海津広子　久保整子
木庭克敏　上妻四郎　吉良　初　菊川有臣　熊懐友春
坂本美津子　沢田博行　杉野健一　高光協三　高光睦子
平　晋一郎　千葉昌秋　霜田康巳　鶴田文史　鳥居正純
柘植周子　高田隆子　寺岡　葵　中田幸作　永田日出男
西村真吉　林田幸子　東　啓一郎　平野正憲　藤森司郎
西田光子　宮崎政喜　三沢幹子　宮内俊介　益子　薫
藤本憲信　弥上是子　吉岡恭子　米原尋子　渡辺秀利

お名前もれの方はお知らせ下さい。

☆寄附者名

井上栄次　上妻四郎　杉野健一　西田光子　櫨川磯子

（前号寄附者に杉野健一氏がもれていました。）

会　計　報　告

1999. 3. 1～1999. 12. 31

収　入	654,852
繰越金	101,875
会費（50名）	150,000
寄　附	180,500
書籍売上	2,200
定額貯金	173,277
郵便貯金	47,000
支　出	654,852
会報39号（封筒等含）	51,500
通信費（電話、切手）	63,703
文学碑修理費	170,000
事務所家賃（4～12月）	135,000
電話機購入	99,330
ゴム印	13,828
雑費（弔電）	1,921
次年度繰越	119,570

＊会費納入について

前号同封の振替用紙でまたは他の方法で納金された分は二〇〇〇年会費です。今号同封の振替用紙は二〇〇一年分会費として納入下さい。なお二〇〇〇年分未納の方は二年分納金していただければ有難いです。会計監査報告は次号でいたします。

＜生きた＞言葉

永田満徳

「方位」二十号の木下順二特集で、「風浪」を担当した折、その登場人物の中で印象に残っている人がいる。それは時代を先取りする人物として描かれた河瀬主膳である。彼のせりふで、

なぜ、て、大百姓はゆとりあるけん相場の上った所で手持ちば売ることが出来ろが？　小百姓はやっと上納の時に今とれた米ば売らにゃならんばってん、そン時は誰も一せいに売時だけん米の値は下ってしまう。そして水呑になってみッと、水呑が旦那さんへの徳米だけは米で納むるけん、昔とおんなじ、これも自分がかつかつ食うだけも残りやせん。どっちば見たッちゃ、肥ゆる方は肥ゆる一方、痩する方は痩する一方たい。

というのがある。

このせりふは、「ふるさと玉名」（一九六三年三月二五日）によれば、実在の老農から聞いた話をもとにしているという。そして、このせりふに対して、「『風浪』という作品がもし少しずつでも真実感をそのせりふの中に持っているとしたら、それは書物ではない生きた肥後の故老たちが私に語ってくれたことばの故である」と述べているように、順二自身＜書物ではない生きた＞言葉として認識している。

このような＜生きた＞言葉は名もなき、土着の人々の中に存在していることが多い。たまたま目にした草枕文学賞を受賞した木野和子の「下ん浜」にも、

「なあ、昔んごつ、小型の木造船でよ、二、三日で大漁旗をおっ立てち、船笛をプーッ、プーッならしち戻ってきた頃がいちばん良かったなあ。分け前、分け前で籠下げち揚場に走ったがな。いまじゃ、遠洋、遠洋でよ、半年ぶり戻ったちおもえば、カツオは上方に上げるばっかりの空戻りや。たまに、荷を積んじょるち思えば、トラックが運んでしまうやろ。そん魚がここへんのスーパーに流れてくるゆうわけやがな、なんでもな、リュウツウキコウゆうものやげなけんどん、漁師町がきいてあきれるがなあ」

という会話があり、これもまた＜生きた＞言葉であろう。

ところで、この＜生きた＞言葉は民衆の言葉と言い換えることができる。もしそうであるならば、河瀬のせりふは明治国家が民衆を犠牲にして成り立っていることを鮮やかに示した点で、まさしく＜生きた＞言葉である。歴史がこういう犠牲を強いることはやむをえないとしても、＜生きた＞言葉を後世に残しておくのは有意義であろう。少くとも明治期の民衆の怨嗟に対する顧慮のなさが民衆に多大な犠牲を強いた昭和期の十七年戦争であったと思うからである。

このたび、熊本大学の大学院に行くことになり、研究を深める身になってみれば、文学者の研究姿勢とはどうあるべきかを改めて考えてみる必要を感じる。つまり、文学作品、特に地方の埋もれた作品の中から＜生きた＞言葉を見つけ出し、その価値に照明を当てることができれば幸いである。

急告　東京世田谷の徳永直旧居保存運動を！

熊本市北千反畑町五―一三　さろん・ど・漱雲　熊本・徳永直の会
〒八六〇―〇八五五　ＴＥＬ・ＦＡＸ〇九六―三四三―〇〇七二
郵便振替　〇一九四〇―二―一一四九八

印刷所　㈱昭和印刷　三四四―五二五二・三四三―三八八六